



図163 遺跡の位置  
5万分1地形図「新潟」

養海山遺跡 江南区茅野山一丁目

養海山遺跡は茅野山本慶寺と大蔵神社を中心とする、亀田砂丘に沿った細長い遺跡である。大蔵神社がある標高約七メートルの丘を昔は要害山と呼び、「養海山」はこの「要害山」が変化したものといわれている。本慶寺の山号も「養海山」である。現在、遺跡周辺は宅地や田んぼになっている。

遺跡の発見当初、大蔵神社の斜面で砥石・鉄鏃・鉄滓などが採集されたため、上杉氏家臣の荒木五郎左衛門の言い伝えや、「要害山」の名前と相まって、中世の城ではないかといわれていた。ところが平成十六（二〇〇四）年に亀田町教育委員会が調査を行ったところ、標高の高い砂丘上ではなく、砂丘下の平坦な土地の地下約三メートルの所から、縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての土器や石器が大量に出土した。砂丘に営まれた遺跡が、地盤沈下により埋没し、その上層に形成された粘土層にバックされて、ほぼ無傷の状態が残っていたものと考えられる。

調査では、西区の緒立遺跡（一一二ページ）の土器と同じ特徴のある、変形工字文と呼ばれる模様が施された弥生時代前期から中期の土器が多く見つかったほか、遠く東北北部から運ばれてきたとみられる土器も見つかった。石器は鏃や錐、小形の磨製石斧などが見つかった。ま



図164 養海山遺跡と茅野山集落



図165 東北北部から運ばれた土器

養海山遺跡の付近には、地下数メートルから弥生土器が発見された西郷遺跡や、日水南遺跡、武左衛門裏遺跡という弥生時代の遺跡がある。この地域の砂丘周辺の地下深くには、弥生前期から中期の集落が眠っているのである。

た、製作途中の石器や石器の材料となる石、石器を作るときに出る石片などもあり、この場所で石器が作られていたことが分かった。養海山遺跡からは木材や動物の骨などの自然遺物もたくさん見つかった。粘土層によってパツクされて空気に触れなかったため、普通は朽ちてしまいう木や骨の残りがよいのである。また、この遺跡に暮らしていた人々が食べたと思われるクルミなどの種実や、イノシシやシカと思われる骨も小片ではあるが、多く出土した。弥生時代になっても、しばらくは狩猟・採集の生活を営んでいたと考えられる。